

自分だけの居場所 模型に

南区 中学で授業

詩人・立原道造

夢の「別荘」見学

中学2年生が「週末に過ごしたい自分だけの居場所」を考える特別授業が、埼玉大付属中（さいたま市南区）で行われた。アイデアは生徒それぞれが模型を作って形にし、校庭に置いて写真に収めた。思春期の中学生が思い描く、理想の空間……。中身が気になるが、子どもたちが自分の好きなものを知るきっかけにしようための芸術教育の一つだ。

（岡田実優）



自分だけの「ハウス」を発表する男子生徒（9月27日、埼玉大付属中）

特別授業は「さいたま国際芸術祭」の一環で企画され、7～9月に6回行われた。生徒約140人が参加し、埼玉大教育学部の石上城行教授（芸術講座）と写真作家の浅見俊哉さんが講師を務めた。

題材として生徒に紹介したのは、叙情豊かな作品で知られた昭和初期の詩人・立原道造（1914～39年）の構想だ。立原は肺病で24歳の若さで世を去った。建築家でもあった彼は闘病中、親しかった詩人が暮らしていた別所沼近くに「週



立原道造
（軽井沢高原文庫提供）

別所沼のほとりに立つ
「ヒアシンスハウス」

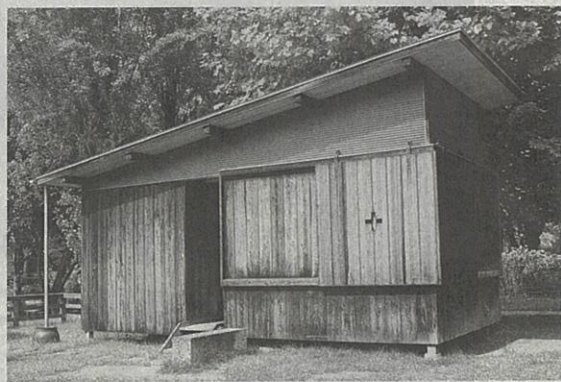
末の創作活動の場」になる別荘を持つ夢を抱いた。

存命中にはかなわなかった夢だが、別所沼のほとりには立原の構想を基にした小住宅「ヒアシンスハウス」がある。地域の文化拠点づくりを進める市民団体が2004年に建てた。立原は、

かれんな花のヒアシンス（ヒアシンス）を漢字で表記した「風信子」という言葉が好きだったという。生徒たちはこの建物を見学したうえで、それぞれが思い描く「ハウス」の構想を練った。「一番大切なものを書き出して考えを整理。淡々とアイデアを形にしていく生徒もいれば、同級生の案を参考にするタイプの子もいた。

最終日となった9月27日には各クラスでグループごとに発表会が行われ、一人一人のアイデアが披露された。「自然に囲まれ、敷き詰められたクッションに癒やされる小屋」「愛犬と心地よく過ごせる空間」。中2になれば、勉強や部活動、友人関係によるストレスも抱える。それぞれの発表は個性的な一方で、大人の願望と大きくは変わらない。

面用紙や発泡スチロール



などで作られた模型は、校庭で一つずつ写真撮影した。自分の理想を形にし、どう見せるかを考えるのも「芸術」といえる。生徒たちは撮影ポイントも自分で探し、光の当て方やアングルにもこだわった。

「好きな競技カルタを静かにできる場所」を考えたという鈴木康裕君（14）は、「アートは遠い存在だと思っていたけど、好きなことを追求するのもアートだとわかり、楽しかった」と笑顔を見せた。

春日部産米粉で食ブランド

市など実証実験

